

体操ゼミナール夏期研修会 講演報告 「ドイツ体操とルードルフ・フォン・ラバン」

菅井 京子

はじめに

20世紀の初め頃、ヨーロッパではドイツを中心に体操改革運動が起こり、それまでのシュピース＝マウル方式の体操に代わる新しい体操が求められた。この改革運動の流れのなかでF. ヒルカー (Franz Hilker, 1881-1969) は、1922年にベルリンで「芸術的な身体修練のための会議」を開催した。1923年にその会議の報告書である『芸術的身体修練』を出版し、1925年には「ドイツ体操同盟 (Deutscher Gymnastikbund)」を設立し、その長として活動を始めた。さらに1926年に『純粹体操』を出版した。ヒルカーは、これらの活動を通して新しい体操の諸派を強く結びつけていった。そして、彼は1935年に『ドイツ体操 (Deutsche Gymnastik)』を著し、新しい体操の拠り所となる指導要領を作り上げた。

新しい体操諸派の多彩な活動については、すでに我が国でも早い時期から紹介がなされている。しかし、この諸派がどのように関わって、『ドイツ体操』(Hilker, F., Deutsche Gymnastik, Bibliographisches Institut: Leipzig, 1935.) が作り上げられたのかということについての具体的な記述は少ない。例えば、大谷武一の『新しい体操への道』には、「新体操諸流派の事業発展の

状況を世間に紹介する目的を以て1926年デュッセルドルフで体操の身体陶冶会議が催された。会議では種々な諸流派の広範囲の方法形成と同時に、材料の点に於いて全く根本的接近がなされた。就中、ボーデの振動及び表現運動、ラバンの跳躍及び運動合奏、メンゼンディーク体系の形成運動は諸流派の信頼を得た。」と、ごく僅かな記述しかみられない。

I. 動きの修練について

グーツムーツ (J. C. GutsMuths, 1759-1839) やヤーン (F. L. Jahn, 1778-1852) がドイツ近代体育の先駆的役割を果たした後、学校への体育の導入は、ドイツ国内の体育論争を経て、19世紀中頃、シュピース (A. Spieß, 1810-1858) によって始められ、マウル (A. Maul, 1829-1907) によってほぼ達成された。このシュピース＝マウル方式の体操は、人間の身体運動を部分運動に分割し、それらをひとつひとつ学習させ、いろいろに組み合わせ、全体的な連続運動に仕立てていく徒手体操や、同様の発想による整列・行進を中心とする秩序運動を主要内容とするもので、自然科学万能の合理的精神に基づき、号令に合わせて一斉に行われる幾何学的・形式的な集団運動であった。こ

れは、時代の精神とも相俟って一世を風靡した。しかし、その後、シュピーズ＝マウルの体操は、あまりに形式的、人為的であり、関節人形運動、操り人形運動であるという批判を受けるようになり、新しい体操を求めて改革運動が起こった。

当初新しい体操諸派はまだばらばらに活動していた。E. ハルテ (Erich Harte) の報告によると、1922年の「芸術的な身体修練のための会議」では、ダルクローズ派、メンゼンディーク派、R. フォン・ラバン、ローエラント派、R. ボーデ、E. ダンカン派の演技発表が行われた。ハルテは、そのそれぞれの発表の具体的な運動について報告している。目的や方法はそれぞれ異なっていたが、この会議での演技発表では、歩く、走る、跳ぶ等の全身的な運動の基礎修練が特徴的であったことがわかる。

F. ヒルカーも『純粋体操』のなかで「呼吸教育においても、筋肉群の鍛錬においても、姿勢や身体形成、緊張や解緊においても、内的あるいは外的な運動の事象が重要であるので、体操においては身体に関するどのような研究も運動修練といってよいであろう。」と述べ、運動修練を新しい体操の中心課題として取り上げている。そして、自然でいきいきとした運動を目指して、いわゆる歩く、走る、跳ぶなどの運動修練が、すでにデルサルト (F. Delsarte, 1811-1871)、ステビンズ (G. Stebbins) の時代から引き継がれ、E. ダンカン (E. Duncan, 1874-1948)、メンゼンディーク (B. Mensendieck, 1864-1957)、カルマイヤー (H. Kallmeyer,

1884-1948)、ギンドラー (E. Gindler, 1885-1961)、ローエラント派の人々、ボーデ (R. Bode, 1881-1970) 等によって取り組まれてきたと説明している。

II. ルードルフ・フォン・ラバンと体操改革運動について

ラバンも『体操とダンス』のなかで、体操は、日常の運動、普段の歩行やステップ、労働の運動から選び出された基礎的な運動や一連の運動を洗練させるものであるとしている。そして、このように選択された運動やその変化・発展を通して、体力や空間支配能力が結果として生じ、それがいろいろな目的に適う。それは、労働や日常生活に役立ち、運動芸術とりわけダンスに、また遊びやスポーツにも役立つと述べ、部分運動の組み合わせではなく全身的な運動を重要視している。さらに、選択された運動は、空間的、時間的および力の要素で変化・発展させることができる。スポーツや運動競技においては常に最高記録や最高技能だけが求められ、すなわちより大きく、より速く、より強くだけが求められ、しばしば痙攣や硬直を引き起こすこともある。しかし、体操やダンスでは、より小さく、より遅く、より弱く等々のいろいろな運動の可能性が追求され、自然な法則に適った運動が実現されると、競技型のスポーツとの違いを指摘している。

V. プレストン＝ダンロップ (Preston-Dunlop, V.) によると、ラバンは1910年にミュンヘンに学校を開き、1912年にはアス

コナの「ダンス農場」と名付けられたセンターで、音響芸術、言語芸術、運動芸術や造形芸術を教えた。ここでの実験的試みや自由な発想による活動は、後の「動きの合唱団」や「コミュニティーダンス」という彼の仕事の基礎となった。多くの人たちと同様ラバンも、人間の文化を破壊するもの、人間を自動人形のレベルへ転落させるものとして機械文明を捉え、機械産業時代を懸念していた。1914年、ラバンはウィーグマン等とともにチューリッヒに学校を開いた。動きの統語論とその実践に関する研究を始めた。そしてそれを記録する方法も工夫した。これが後の舞踊譜のシステムにつながっていく。彼が、運動の空間的、時間的、力動的要素の概念を完成させたのもこの時期であった。彼は、空間的スケール、ダイナミックス、リズムの変化に基づく動きの練習体系 (a system of movement exercises) を作り上げた。空間的スケール、ダイナミックス、リズムの要素は、規定された動きの課題のなかにも、即興の動きや創造のなかにも、あらゆる動きのなかに現われてくるものと捉えられていた。そして次に彼は、表現的な動きの練習を通してダンサーとその周囲の空間との関係に、また群舞やグループでの即興を通してダンサーと他のダンサーとの関係に注目した。ラバンの体系においては、芸術性と創造性が強調された。そこから彼は舞踊学 (Choreographie) と舞踊譜 (Kinetographie) を展開していった。劇場のダンスの仕事と並行して、彼はコミュニティーダンスとしての「動きの合唱団」

の構想を発展させた。伝統的な歌う合唱団から発展させたもので、そのねらいとするところは、参加者自身が楽しめる祭のような作品を作ることであった。その頃、産業革命によって地域の共同体はその存続の危機に瀕していた。ラバンは、その共同体の娯楽として、共同体の結束を強めるものとしてダンスを再編成した。1922年から1924年までにハンプルク市民運動合唱団を初めとして、7つの団体が結成された。

Ⅲ. ドイツ体操の領域について

『ドイツ体操』は、数行の短い前文で始まり次のような内容をもつ小冊子である。

「前文」S.9

「ドイツ体操の特質について」S.9

「ドイツ体操の研究領域」S.18

「ドイツにおける体操の歴史」S.29

写真一覧・注 S.41

『ドイツ体操』に提示された「ドイツ体操の研究領域」の具体的内容は、「動きの基礎修練 (Grundschulung der Bewegung)」, 「姿勢修練 (Haltungsschulung)」, 「動きの発展 (Bewegungsentwicklung)」, 「手具を伴う動き (Bewegung und Gerät)」, そして「動きの構成 (Bewegungsgestaltung)」の5つである。

「動きの基礎修練」では、立位で行われる5つの基本運動が取り上げられている。日常的な運動から歩く、走る、跳ぶの3種、そして自由な運動としてはずむ、振るの2種である。はずむと振る運動は、それぞれ単独でも、また歩く、走る、跳ぶの運動のな

かでも行われる。これら5つの運動は、身体的特徴だけでなく心的また精神的にも考慮され、全身的に、すなわちホーリスティックに扱われるべきであるとされている。たとえば、歩く運動の特徴としては、身体的には安定や動的バランス、心的には閑静や瞑想、精神的には目標の明確さや威厳などが挙げられている。しかし、具体的な動き方の指示はされておらず、それは実際の指導の場での教師の仕事であるとされている。

「姿勢修練」は、動きの基礎修練を補完するものとして位置づけられ、骨格、筋肉、器官の発達不全やそれらの発達のバランスの崩れによる動きの不活発さ、抑制や欠陥を取り除くために行われるとされている。よい姿勢修練の目安として挙げられているのは、胸郭と骨盤のしなやかでバランスのよい重なり合いを伴うゆったりとしたS字形を保つ脊柱、さらに筋組織等によってしっかりと支えられた上半身と下半身の身体中央部での結合等である。

動きの基礎修練と注意深い姿勢修練を土台にして可能になる「動きの発展」では、基礎的な動き自体の変化・発展、組み合わせ、繋ぎ合わせ等が扱われる。基礎的な動きの変化・発展は、それぞれの動きがもつ律動的特性を高めたり、変化させることによって、また時間的、空間的に変化させることによって行われる。動きの組み合わせや繋ぎ合わせでは、はずみながら歩く、振りながら走る、走ってから跳ぶ等の他、抵抗のある動き、たとえば押す、引く、突く、打

つ等とも組み合わせ、繋ぎ合わせることができる。

「手具を伴う動き」は、動きの発展の一方法であると考えられる。『ドイツ体操』の動きの修練は立位での運動を主眼としているので、用いられる器具は固定した器械や可動式の大きな器械ではなく、ボール、棒、砲丸等、基礎的な動きの修練のために安定、はずみ、活気等を促し力動的な変化を与えられるような手具に限られている。

「動きの構成」については、『ドイツ体操』ではほとんど説明されていないが、暗示的に音楽、詩やダンスとの密接な関係に言及されている。ダンスとの関係をヒルカーは、「祝祭のときの共同体の運動によるコミュニケーションとしてのダンスは、ドイツ体操の課題のなかに含まれる。一方芸術ダンスはそれ独自の芸術的領域に入る。」と述べている。動きの構成について、彼は体操と他の運動芸術領域との共通部分にひとつの大きな可能性を見出しているように思われる。そして、「パレード、輪舞、運動遊戯そして民族的ダンスの育成によって共同体の祭りの準備をすることが『動きの構成』の使命である。その際には個人の特別な技能や芸能を際立たせることが重要なのではなく、やってみせることや見物することも重要ではない。そうではなく、それに参加すること、共に行うことが重要なのである。」とも述べている。今日、ヨーロッパを中心に世界的な規模で行われているギムナストラダ(Gymnaestrada)等の体操祭は、F. ヒルカーの「動きの構成」についての彼の構

想を取り入れ、改善を加えた展開例であると考えられる。

ラバンは、動きの基礎修練—発展—構成の流れのなかで、特に動きの発展について、空間的・時間的・力動的な変化とその調和という方法論で大きな影響を与えた。さらに、コミュニティーダンスとしての「動きの合唱団」の構想や実践は、「動きの構成」の展開例として、ドイツ体操に大変大きな影響を与えたといえる。

おわりに

ラバンは、1920年代にダンスの改革に力を尽くすとともに、新しい体操の諸派とともに体操の改革をも推進した。『ドイツ体操』の「体操の領域」では、特に、「動きの発展」と「動きの構成」に大きな影響を与えた。